



私のライフシフト

会社員からワイン用ブドウ栽培農家へ

私は50歳を前に、二十余年間にわたる東京での会社員生活にピリオドを打ちました。

「人生の夏休み」と称して今後の人生について考える1年間を過ごし、長野県立科町^{たちしなまち}にて、ワイン用ブドウの栽培を始めました。収穫したブドウは近隣のワイナリーに醸造を委託し、自社ブランドでワインを販売しています。

一大決心からはや5年近くが経過し、当時思い描いていたことで実現できたこと、またできていないこと様々あります。人生100年時代と言われます。老後のお金に親の介護、大地震や自然災害、日本の国力低下や深刻化する環境問題、国際紛争など、内外に様々な懸念材料がある中で、どのような生き方をするのか。私の事例が何らかの役に立てば幸いです。

多忙な生活の中から膨らんでいった疑問〜ライフシフトの背景〜

会社員時代は様々な意味で余裕がありません。

せんでした。平日は朝から夜までスケジュールびつちりのフル回転。休日でも会社での負担を減らすつもりで仕事をしていました。会社が成長し、全社的に人的リソースが逼迫していた状況下、自分の力量に限界があったのでしよう。心身が疲弊していく中で、そんな生活から抜け出したいといった逃避的な願望を徐々に強く感じるようになっていきました。

同時に、会社員生活も残りだいたい半分という時期を迎え、定年退職した後の人生も含め、どのような生き方があるのだろうかと考えようにもなっていました。定年まで勤め上げれば経済的には困らないかも知れない。でも、退職後に打ち込みたい趣味があるわけでもなく、このままでは退屈な老後を過ごすことになってしまうのではないかと。残りの人生全てを視野に入れ、退職という思い切った決断をしたのです。

自然豊かな田舎で暮らしてみたいという



トラストアンドアソシエイツ
株式会社 代表取締役
中村 大祐

○ [なかむら・だいすけ] ワイン用ブドウ栽培農家。農林漁業体験民宿経営。23年間の会社員生活を経てワイン用ブドウ栽培農家に転身。近隣ワイナリーに醸造を委託、自社ブランドでワインを販売。在職中はSE、人材育成等を担当し、産業カウンセラー、GCDF キャリアカウンセラー等の資格を取得。

憧れのようなものを以前から抱いていました。都会で暮らし、会社勤めをしていると、否が応なく競争社会に身を置くことになり、効率重視、成果主義が謳われ、疲労が蓄積していく。それを解消するために消費行動に走り、そのためのお金を稼ぐ。また、自分の子供たちにはそんな社会で勝ち組に入れてあげたいが、格差社会では高学歴が有利。それにもお金が必要だから、多少の辛抱をしても都会での会社勤めが現実的というものが、一つのよくある考え方ではないでしょうか。

しかし、そこはぎすぎすした人間関係や、自己防衛的な社会であって他人を思いやる余裕がない世界。仕事ができる人が評価される社会。人間は本質的に平等であって優劣はないはずなのにそれを忘れてしまうような社会。今振り返ってみると、私自身がそんな場所で自分を見失い、田舎暮らしに新天地を求めたのかも知れません。



>>> 私のキャリアデザイン



自分のブランドで販売しているワイン

◆ ◆ ◆ ワイン造りは農業 〜田舎暮らしへの憧れ〜

単に田舎暮らしをしたいということであれば、地方都市の会社へ転職し、これまでの経験を活かした職に就くという選択もあり得たと思います。でも私はもつと田舎、自然に囲まれた静かなところで暮らしたかったです。そうすると収入源は限られるため、考えたのが一次産業です。中でも農業は、会社を辞める数年前に近くの農家の方の手ほどきを受けながら家庭菜園をやっていた経験もあり、関心がありました。またそれを生業にする難しさも考えたりしていました。

そこで浮上したのがワインです。ワインはブドウを100%原料とすることから、ワイン造りはブドウ造り、すなわち農業と言われます。さらに、ブドウをワインに加工して販売まで手掛ける六次産業であれば、これまでの経験を少しは活かすことができ、脱サラしても生活できる程度には収入を得られるのではないかと当時は考えたのです。

また、定年退職する歳を過ぎても身体を動かし続けることができ、健康維持にもつながるとも考えました。

ワインは好きでしたが、蒔蓄を語れるほど詳しくもなく、ワイナリーを経営するということがどういふものかを知っていたわけでも

ありません。ただ、畑で汗水垂らして身体を動かす。自分で育てた野菜で作った料理とワインを一緒に愉しむ。そういう生活への憧れがありました。会社を辞める数年前からだっただけですが、長野県でワイナリーを目指す人を対象にしたワインアカデミーが設立されることも知っていました。

ワインについて何も知らない私がワイン用ブドウ栽培に情熱を傾けられるだろうか。でも、70歳くらいまで働くことを考えると、会社員生活がちょうど半分くらい経過したタイミングだし、長い職業人生を考えると、少しくらい休みをとって休養しても良いのではないかと。熟慮の末、思い切って会社を辞め、「人生の夏休み」と称して、1年間ワインアカデミーに通いながらワイナリーの設立を目指すことについて考えてみることにしたのでした。

◆ ◆ ◆ ご縁をチャンスに 〜立科町での就農〜

アカデミーではまずブドウの栽培、続いてワインの醸造、そしてワイナリーの経営について学びました。

半年が過ぎ秋を迎えた頃、翌春のアカデミーの終了後、「人生の夏休み」の後のことを考え始めていました。学ばば学ぶほど、ワイナリーへの道は遠く険しいことがわかってきていました。苗を植えてから醸造に資するブドウが育つまでに5年程度。そこから、採算ラインと考えると1万本程度のワインが

作れる規模まで畑を広げるにはさらに数年。ブドウ栽培に必要な機材や醸造設備、ワイナリーの建築にはかなりの資金が必要になる。そして何より売れるワインやその仕組みを作れるか。

当初から考えていた会社員生活に戻ることも現実的かつ堅実な選択肢の一つでした。でも、もし今やらなかったらいつか再挑戦するだろうか。そう考えた時に頭をよぎった言葉が「now or never」。今でなければまたと機会はない。最終的に、自ら下した決断が不本意な結果になったとしても、人生の最期を迎える時、やらなかった後悔ではなくやっ後悔する方を選ぶ。そう思っって挑戦する決意を固めたのです。

ちょうどそんなタイミングで、長野県立科町がワイン用ブドウの試験栽培地を民間に委ねるとの話を紹介して頂きました。ブドウの樹を植えて成長するまでの数年間を待たず、醸造できるブドウの樹約500本を手に入れることができる。ワイナリーを目指すのであれば、造りたい目指すワインがあつてブドウがあり、そしてその栽培にふさわしい気象条件や土壌から場所を決める、すなわち逆算してブドウの栽培地を決めることが望ましいと考えていました。

しかし家族4人を抱える身、ブドウを栽培する土地に当てがあるわけでもなく、これから一からスタートすると、栽培を始めるまでに何年もかかってしまい現実的には極めて厳しい。畑があれば経験を積むフィールド

にもなる。急な展開に迷いに迷いましたが、これもご縁、むしろ機会をチャンスにすべしと考え、立科町での挑戦を決意したのです。

●●●●●
家族やお金の問題を超えて
 ～根底にある価値観が原動力～

一連の決断に際しては、家族にはほとんど相談せず、強引に進めてきたというか、自分の判断・決心に従ってもらったというのが実態です。そもそも退職については、誰にも相談せず、熟慮に熟慮を重ねて決めました。それは、誰に相談したとしても絶対に反対されるに違いないと思ったからです。反対されても必ず実行する、そんな決意が揺らぐ不安をぬぐえなかったのです。もしそうなったら今の生活がまだ続くのか、それだけは避けたい。だから自分でしっかり考えて決めようと思ったのです。

自己理解を深めるために心理カウンセラーのところに通い、自分の想いや考えを話して思考の整理をしたり、ファイナンシャルプランナーの方に金銭的なシミュレーションをしてもらったりもしました。家内にすらじっくり相談したことはありません。弱音を吐いたり、いつかは今の生活から抜け出したいといった心情を吐露してはいました。ただ、本当に退職してしまうとは思っていなかったかも知れません。そんな家内のその頃の胸の内を推し量ると、怒り、あきれ、不安、あきらめ、そういった複雑かつネガティブな感情だったと思います。

家族には不安定かつ先の見えない生活のために心配をさせてしまっているということ、金銭的に厳しい生活を強いていることについて、衷心から申し訳なく思うとともに、忸怩たる思いもあります。特に専業主婦から会社勤めを始めることになった家内には、家事や子供の世話まですべてを任せることになり、感謝の言葉が見つかりません。家族のことを想い、自分が行った選択が正しいのか考えない日は1日たりともありません。この先、家族の理解が得られることがあるかはわかりませんが、自分が行った選択に誠実に向き合い、一生懸命生きることしか私にできることはないと思っています。

会社を辞めるにあたって、お金をどうするかは当然考えました。幸い、自宅のローンも完済していましたが、家族全員健康でこれと言って大きな出費の心配もありませんでした。数年間無収入であっても、新規就労者向けの補助金も活用できるので、ぎりぎりなんとかかなりそうだ。最悪の場合は会社員に戻ろうと考えていました。因みに、当てにしていたその補助金は申請したにもかかわらず、うやむやのまま放置されるという、悲しくかつ切実な状況になってしまいました。

人生で一番お金がかかる時期に会社を辞めたこともあり、想像していた以上に苦勞しています。転機が55歳くらいだったら3人の子供の学費も一段落し、金銭的には楽だったと思います。でも、タイミングとし

てはちょうど良かったんだと思っています。それまでにやることはやってきた。また、もっと遅かったら、もうちょっと働いて定年退職金をもらって辞めようという誘惑にかられたでしょう。80歳を超えて元気に生きるというイメージで考えるとちよつと良いと自分に言い聞かせたところもあります。

精神的に疲れ明るい将来像も描けない。そんな人生を自らの意志で続けていていいのだろうか。このままでは死ぬ時に絶対に後悔する。たった一度の人生を、人から与えられた道で生きる、そういう生き方は嫌だ。自分の人生は自分で決める、根底にある価値観が自らを動かしたのだと思います。

●●●●●
自分の選択を信じて進む毎日
 ～まだまだ途中経過～

退職から今に至るまで、一生忘れないであろうことがたくさんありました。その一つがブドウ栽培農家になって間もなくの友人の言葉です。「思い切ったな。俺にはできない。でもお前にはチャンスがある。チャンスがあるなら賭けてみる」。人それぞれ大なり小なり事情を抱え、人生を変えるような選択をしたくてもできずに辛抱しながら生きている。私は幸い家族を含めて健康面の不安がなく、それまでのささやかな生活の積み重ねで、少しの間であれば暮らせる経済状況でもある。ならばやってみよう。

以前とは異質の厳しい生活になっているのですが、それは見方を変えれば自分の人生



>>> 私のキャリアデザイン



シャルドネを育てているヴィンヤード（ブドウ畑）

を生きているという証なんだと自分に言い聞かせることも少なくありません。時折、初心に帰るといふか、あの時の友人の言葉を思い出し、自分を励まします。昔やりたかったことを今やれているんだという現実を確認し、前に進むエネルギーにしています。

私の大きな目標は、いつか自分のワイナリーを持つこと。それには品質の高いブドウが一定の収量で必要となります。ブドウ栽培の経験を積みながら少しずつ畑を拡大するため、10年、20年といった時間軸の世界です。

それに向けていろいろな意味で持ちこたえることが当面の課題です。今は、当初思い巡らせていたことは必ずしも同じでないものの、自分が納得できる人生にすべく、やりたいことを一つひとつ実行しています。

もともとは1人で畑に出て、ブドウに向き合う生活を送るつもりでした。自然の中で汗水を垂らして働き、肉体的疲労感を感じながら、その地で採れた食材とワインで愉しむ。ただ純粹にそれだけでした。

しかし、果たしてそうなのだろうか？アカデミーに通いながら、だんだんと「人から支えられ、勇気づけられて生きていること」の大切さを感じるようになってきたのです。また、「1人ではなく、支え・支えられて生きていくこと」の方がより本質的に幸せな姿であつて、それこそが追求するにふさわしい姿ではないかとも考えるようになりました。それを具現化する活動にも力を入れているところです。

丁寧育てたブドウから造られた美味しいワイン、ここに来ると楽しい、気軽な感覚で文化・芸術に触れられる、知的好奇心がくすぐられる、情緒が落ち着く・ほっとする、そこに集う信頼できる仲間たちから刺激をもらえる等々、癒しの機会を提供できればと考え、様々な企画を実行しています。

ライフシフトについて考えておられる方に言えることは
熟慮と行動！

たくさんの方に助けて頂きながら、いく

つかの「計画された」偶然にも恵まれて、なんとかやっているとというのが実態です。疎かになっていた家族との時間を充実させたいと思っていたのに、自らの選択で単身赴任という皮肉な現実もあります。これから先、今の生活を続けていけるかどうかすらわかりません。

そんな私が、自身の経験から言えることは何かと考えた末に辿り着いたのは、自分の価値観を突き詰めて考え決断することです。自分の価値観を深く考え向き合うといったことは、普通の生活ではなかなかやらないと思います。私はそうせざるを得ないほど疲弊していた、向き合わざるを得ない状況に追い込まれていた、ということなんだろうと思います。

また、今となっては、田舎暮らしがしたかったとかそういったことは、すべて後付けの言い訳に過ぎないのかも知れないと思うこともあります。普通は自分の価値観に向き合う必要もなく、ライフシフトするという行動に辿り着かないのだろうとも思います。

でも、ライフシフトするのであれば、とことんまで自分と向き合うことだと思っています。それがライフシフトするしないにかかわらず、これからの人生をより良いものにすると思います。その上で行動あるのみ。やってみなければわからない。熟慮した上での思い切った行動で、未来は切り開かれてゆくはずと私は信じています。